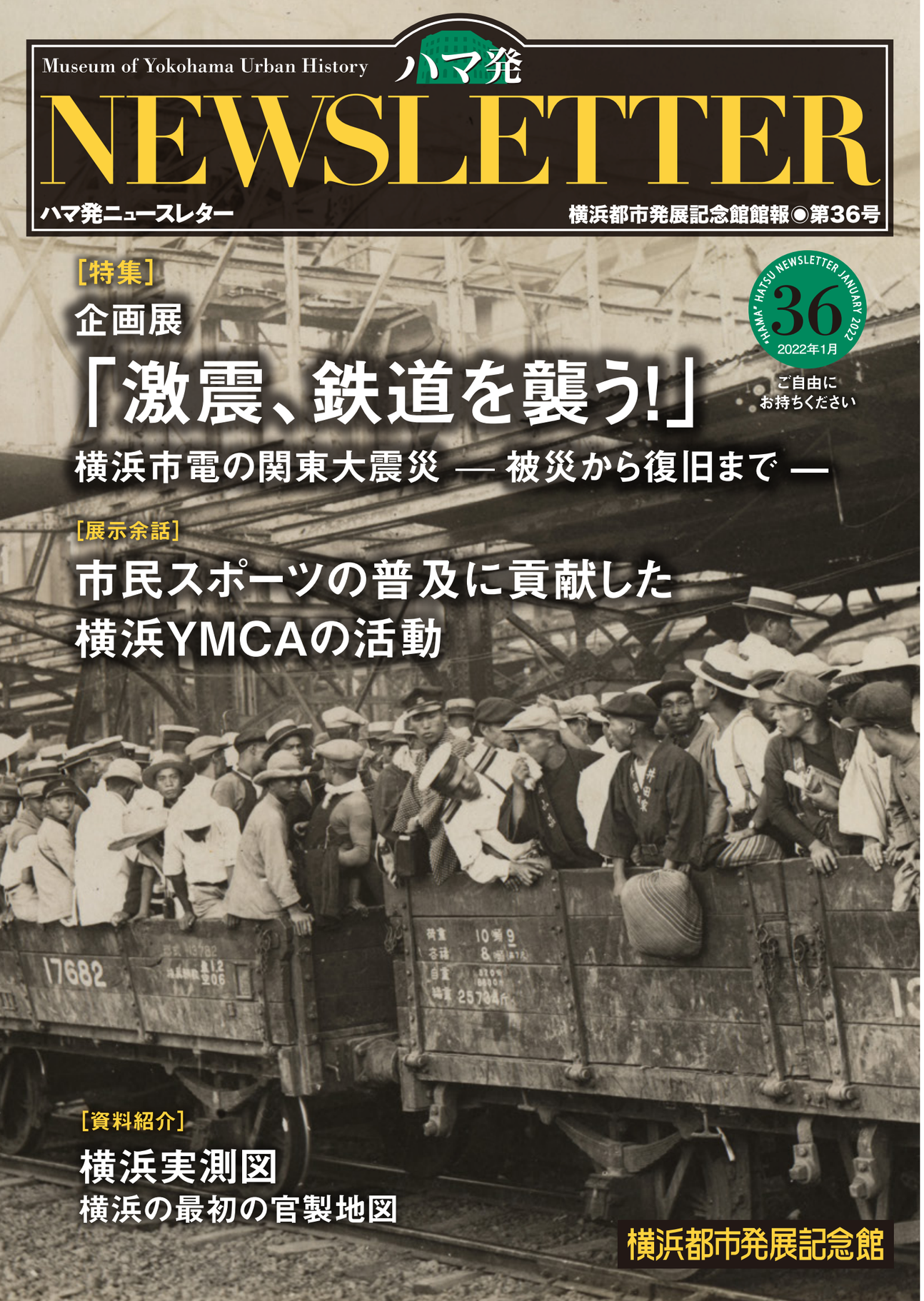
Museum of Yokohama Urban History ハマ発
# NEWSLETTER
ハマ発ニュースレター　横浜都市発展記念館館報◉第36号

HAMA HATSU NEWSLETTER JANUARY 2022
36
2022年1月
ご自由にお持ちください



［特集］
## 企画展「激震、鉄道を襲う!」
### 横浜市電の関東大震災 ― 被災から復旧まで ―

［展示余話］
## 市民スポーツの普及に貢献した横浜YMCAの活動

［資料紹介］
## 横浜実測図
### 横浜の最初の官製地図

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER　第 36 号　2022(令和 4)年 1 月 15 日発行(年 2 回発行・不定期)
編集／横浜都市発展記念館　発行／公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団　〒231・0021　横浜市中区日本大通 12　TEL. 045(663)2424　FAX. 045(663)2453
題字ロゴ／高橋憲介　印刷・製本／株式会社 エイコープリント　本誌からの無断転載を禁止します。

## EXHIBITION　企画展のご案内

焼失した2代目横浜駅
1923（大正12）年9月　横浜開港資料館所蔵

鉄道開業150周年記念
## 激震、鉄道を襲う！
### ―関東大震災と横浜の交通網―

1923（大正12）年9月1日、神奈川県を震源とするマグニチュード7.9の地震は、南関東一帯に大きな被害を与えました。特に横浜市街中心部は激しい揺れに襲われ、交通網も壊滅的な打撃を受けます。本展示では、当時の写真を中心に、横浜の交通網、鉄道の被災から復旧、復興に至る過程を追いかけていきます。

**3月12日(土)～7月3日(日)**

【会期】2022（令和4）年1月15日（土）～ 3月27日（日）

【図録】『激震、鉄道を襲う！』　横浜都市発展記念館／編

## 寄贈資料の紹介

2021（令和3）年7月以降に受贈した資料です。（敬称略）

| 寄贈資料名 | 点数 | 寄贈者 |
|---|---|---|
| 南永田団地上空写真（1975年頃、紙焼き） | 1 | 左右津孝彦 |
| 2002FIFAワールドカップ大会報告書 | 1 | 金近忠彦 |
| 2002FIFAワールドカップ大会写真集 | 1 | 〃 |
| 2002FIFAワールドカップ横浜開催記録 | 1 | 〃 |
| 2002FIFAワールドカップ横浜市ボランティア記録集 | 1 | 〃 |
| 『韓国がわかる本』ワールドカップ横浜市ボランティア（2002年） | 1 | 〃 |
| 『日韓サッカー激闘の歴史』横浜市国際交流協会（2000年） | 1 | 〃 |
| FIFAコンフェデレーションズカップ2001冊子 | 1 | 〃 |
| 2002年ワールドカップ関係資料ファイル | 2 | 〃 |
| 2008年横浜オリンピック案関係資料ファイル | 1 | 〃 |
| 2002FIFAワールドカップ横浜開催映像記録（VHS） | 1 | 〃 |
| 「日本サッカー80年の歩み」（DVD） | 1 | 〃 |

| 寄贈資料名 | 点数 | 寄贈者 |
|---|---|---|
| 日本サッカー協会80周年記念カードセット | 1 | 金近忠彦 |
| 2002FIFAワールドカップ記念品（一括） | 5 | 〃 |
| 平成年間の鶴見区を中心とした横浜市内の風景・イベント・寺社・祭事等カラー写真（ポジもしくはネガフィルム原版一式） | 3,340 | 若林のぶゆき |
| 横浜市内撮影写真ネガフィルムおよび紙焼き（1958～1962年） | 17 | 高森惇 |
| 近代港都横浜（絵葉書） | 1 | 〃 |
| バンドホテル新館増築工事設計図（1967年） | 1 | 〃 |
| 神奈川県住宅供給公社の住宅販売パンフレット（一括）（1960～1990年代） | 45 | 〃 |
| 神奈川県住宅供給公社資料（一括） | 7 | 〃 |

## 横浜都市発展記念館　利用案内

**■開館時間**
午前9時30分～午後5時（券売は閉館30分前まで）
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開館時間等を変更する場合があります。

**■休館日**　毎週月曜日・年末年始ほか
（月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館します。）

**■観覧料**

**上記企画展開催期間**

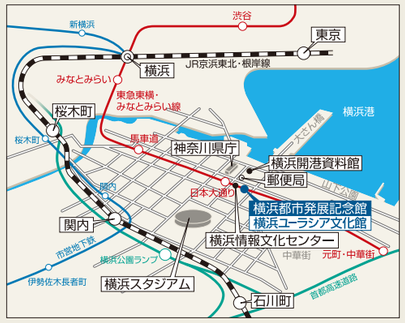
企画展
一般500円／小・中学生、および市内在住65歳以上の方250円
（企画展の観覧券で常設展もご覧いただけます。）

常設展のみ
一般200円／小・中学生、および市内在住65歳以上の方100円

**それ以外の期間**

常設展のみ
一般200円／小・中学生、および市内在住65歳以上の方100円
※毎週土曜日は小・中・高校生無料
※「障害者手帳」「愛の手帳（療育手帳）」などをお持ちの方は、無料です。

**■ホームページ**
http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/




### 交通アクセス
- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅（３番出口）0分
- 横浜市営地下鉄ブルーライン関内駅（１番出口）から徒歩約10分
- ＪＲ京浜東北・根岸線関内駅（南口）から徒歩約10分
- 横浜市営バス・神奈中バス「日本大通り駅県庁前」下車徒歩1分

◉表紙図版
横浜から地方へ避難する人びと
1923（大正12）年9月　当館所蔵

※本誌は当館ホームページでもご覧いただけます。

編集後記
明けましておめでとうございます。2022（令和4）年は、1872（明治5）年に横浜と東京（新橋）との間に日本で最初の鉄道が開業してから150年の節目にあたります。これを記念し、当館では上記の企画展を開催しています。どうぞご来館ください。（岡）

◎次号発行予定　2022年8月頃

【特集】

# 企画展「激震、鉄道を襲う！」

## 横浜市電の関東大震災 ―被災から復旧まで―

1923（大正12）年9月1日午前11時58分、神奈川県西部を震源とするマグニチュード7・9の地震が発生、南関東一帯は激しい揺れに襲われた。その犠牲者の数は街が焼き払われた東京や横浜を中心に約10万5000人に上った。今日、「関東大震災」と呼ばれるこの地震災害では、人員や物資の輸送を担う鉄道も大きな被害を受けた。本稿では、横浜市民の足であった電気鉄道（路面電車）、横浜市電気局の運営する「横浜市電」に焦点を絞りながら被災から復旧までの過程を追いかけていきたい。

❶ 倒潰した滝頭の施設
1923（大正12）年　当館所蔵

### 横浜市電の震災記録

横浜市電気局の被害や応急対応、復旧・復興の過程については、横浜市役所市史編纂係編・発行『横浜市震災誌』第三冊（1926年）や横浜市役所編・発行『横浜復興誌』第四編（1932年）に概要がまとめられているほか、1940（昭和15）年に多田純一（電気局会計課長）の編纂した『横浜市電気局事業誌』も事業単位の震災対応を整理している。また、発行年月日は定かではないが、電気局は写真帳として『大正十二年九月一日 大震火災電気鉄道被害情況』を編纂し、文字以外の視覚的な情報を残していった。ここに収められた写真は『横浜復興誌』や『横浜市電気局事業誌』など横浜市関係の刊行物に用いられただけでなく、鉄道省が編纂した『大正十二年 鉄道震害調査書』（鉄道省大臣官房研究所、1927年）にも活用され、被災状況を現在に伝えている。さらに同省は『大正十二年度 鉄道省年報』（1925年）でも横浜市電の被災状況を整理しており、これらが震災時の横浜市電を分析する際の基礎資料となる。

1921（大正10）年4月、横浜電気鉄道株式会社から事業を引き継いだ横浜市電気局は、滝頭町上江（現・磯子区）に事務所を置いたほか、日本橋と馬車道に出張所、元町に貨物取扱所を配置していた。組織は局長以下、庶務課、運輸課、工務課、会計課の四課から構成され、地震発生時の電気局長は青木周三（横浜市助役兼務、初代電気局長）、幹部は庶務課長松尾修造、運輸課長武内三省、工務課長矢野充、会計課長寺尾傳蔵、技術長朝倉政次郎であった。地震発生時、滝頭に勤務していたある電気局職員は、「あの時、私は〝午後番〟でちょうど出勤しようとしていた。ぐらぐらっと揺れて、滝頭車庫の裏にあった局の公舎が次々につぶれた。外へ飛び出したが、地面にはね飛ばされるような感じで歩けなかった」と回想しており、激しい揺れに襲われたことがわかる（横浜市交通局編・発行『ちんちん電車』1972年、53頁）。

当時の職員数は1019人で、そのうち5人（嘱託医師1人、看護師1人、職工3人）が犠牲となった。また、電気局は153両（保線車両を含む）の車両を保有していたが、運転中だった88両中57両を焼失、貨車1両も失った。さらに高島町の車庫にあった17両が火災によって失われたほか、滝頭の修繕工場でも建物の倒潰によって19両を失う。各車両に電力を供給する千歳町変電所や常盤町変電所、高島町にあった火力発電所も地震によって破壊されるなど、横浜市電の機能は完全に停止してしまった。

### 市電関連施設の被害

地震発生時、内田町の横浜船渠に勤務していた関根八郎は、毎日、麦田の停留所から市電を利用して通勤していた。震動が収まった後、関根は西竹之丸（現・中区）の自宅へ逃げる途中、京浜電車の高架を抜けて桜木町通りに出た。その回想録には、「市電のレールが飴の様に大きく波を打って曲る。道路は各所でメチャメチャになって居るのが目の中に飛込んで来た。そこここに電車は立往生」と、市電の様子を記している（関根八郎「関東大地震」、1981年、横浜開港資料館所蔵）。送電が停止したため、電車は一斉に停止したと考えられる。

こうした関根の回想にあるように、激震によって軌道は全線にわたって破壊され、各所で寸断されることになった。特に神奈川―横浜駅間、吉田橋―駿河橋間、市役所―元町トンネル間、塩田―日本橋間の被害は大きく、神奈川―横浜駅間にあった高島町の月見橋や築地橋は火災の熱で破壊されてしまう。また、河川に沿って軌道が敷設された吉田橋―日本橋間、足曳町から日本橋の間では、護岸の崩壊とともに軌道も大きく変形してしまった。下末吉台地の一部を構成する野毛や山手、本牧などでは、各所で崖崩れも発生、建物を押し潰したほか、元町から麦田へ抜ける山手トンネルの入り口付近でも土砂崩れが発生し、車両の通行は不可能となった。

### 電気局の応急対応

局長の青木周三は家族を失いつつも、職員とともに市電の復旧にむけて奔走していく。9月3日、応急対応の体制を整えるため、横浜市役所は局課の再編を実施する。それに伴い、電気局は車馬係、電気局留守係、交通係の三つに改編された。職員たちは復旧の準備作業を進めるが、被害箇所が多く、軌道や電線、枕木等の材料も購入できない状況だった。しかし、新規路線の工事に着手していたため、その材料を復旧工事にまわすことができた。さらに職員を大阪等に派遣して応援を求めたほか、市内に展開していた陸軍の鉄道連隊にも協力を求め、復旧工事を進めていった。加えて、車両の修理、補充も進め、屋根のないバラック電車を導入していく。

9月30日、横浜市会は電車復旧区間乗車料金条例を制定、その後、電気局は10月2日に神奈川―馬車道間を開通させた。翌3日の『横浜市日報』は「市内電車は予定の通り二日午前六時から神奈川馬車道間の運転を開始し三十一日ぶりで威勢のいゝ姿を見せたが、二分をきと云ふ予定通り至極順調に配車され朝の内こそ遺（ママ）に乗客殺到し、溢れた乗客は窓の棒にまで鈴なりとなる混雑を見せたものゝ漸次に緩和され、七銭の特定賃銀も批難なく円滑なる運転ぶりを続けて居る」と、復旧当日の様子を伝えている。電気局は発電施設を失っていたが、群馬電力会社や京浜電気鉄道から電力を得つつ、復旧区間を拡大、10月26日に全線開通することになった。地震発生から約二ヶ月後、不十分ながらも市民の足は回復していったのである。

（吉田　律人）

❷ 桜木町停留所に停車した市電130号車
1923（大正12）年　横浜開港資料館所蔵

❸ 新吉田川周辺の被災状況
1923（大正12）年　横浜開港資料館所蔵

❹ 元町トンネルの被害
1923（大正12）年　当館所蔵

❺ 市電の復旧とバラック電車
1923（大正12）年10月　当館所蔵

展示余話（てんじよわ）

# 市民スポーツの普及に貢献した横浜YMCAの活動

本年度開催の企画展「スポーツの祭典と横浜」（2021年7月17日～9月26日）では、明治期の居留地時代から1964（昭和39）年開催の第18回オリンピック東京大会に至る、横浜スポーツ史に関する地域資料を展示した。諸種の資料の中でも、横浜YMCAが所蔵する大正・昭和戦前期の資料群を初公開できたことは、本展示の成果といえる。本稿では、横浜における市民スポーツの普及に貢献した横浜YMCAの活動について紹介したい。

横浜は開港以来、居留地に住む外国人によって様々なスポーツが持ち込まれた近代スポーツ発祥の地の一つである。明治以降、日本人もスポーツを楽しむようになるが、市民スポーツのうち、特に室内競技の普及に大きく貢献した組織が、中区常盤町を拠点として現在も活動を続ける横浜YMCAである。同会は1884（明治17）年に横浜海岸教会の青年たちが中心となって結成した基督教青年会を起源とする組織で、キリスト教の精神を基礎とした社会問題に対する取り組みや、英語教育の普及に努めたほか、1923（大正12）年の関東大震災の際には市民の救済活動に尽力した。震災後、同会の体育部が中心となって様々なスポーツ普及活動を積極的に展開し、戦前期の横浜における社会体育の代表的推進母体として活躍することになる。

❶ 市民スポーツ普及の拠点となった初代横浜YMCA会館
1924（大正13）年頃　横浜YMCA所蔵

横浜YMCAの活動の拠点となったのが、1916（大正5）年に竣工した初代会館（❶）である。本会館には、集会場・図書館・英語学校など様々な機能を持つ施設が備えられていたが、特筆すべきは神奈川県初となる本格的な室内体育館が設置されたことで、バスケットボールやバレーボールコートなど、最新の設備が完備された、国内有数の近代的な体育館であった。本会館は関東大震災による被害を耐え、震災後は多くのスポーツイベントが開催されている。なかでも、定期的に開催された体育実演会は市民の人気を集めたイベントであった。横浜YMCAの機関誌『横濱青年』第112号には、1925（大正14）年5月に開催された体育実演会の様子が以下のように記されている。

若葉の香りなつかしき五月二十三日の夕べYMCA体育部の年中行事の一つである体育実演会を催しました、六時半の開会前に場内は既に熱心なる観衆を以てうづめられたのも主催者側として感謝の念に堪へない次第であります。会は活気溢る、村上総主事のスピーチに始まり終始賑やかな気分の内に面白いプログラムを次から次へと進行する事が出来ました。少年部のボーイズのワンズドリルも気持ちの好い一つでした―市内各小中学校等にバスケットボールが普及された今日―此の技の先駆者たるYMCAのバスケットボールゲームは多大の興味を持って理解されて観られたのも喜ばしい事でした。たゞ会場の狭まき為め充分の活動が出来なかったのが残念でした。フライリングやマットウォークの妙技にハラ〳〵させる中に時々出て来るジョーカーに思はず失笑させられながら鮮やかな体育ダンスに見とれ最後に真暗の中に火花飛び交ふトーチスホンギングを以って終ったのは十時頃でありました。（後略）

この記述からは、バスケットボールの試合や各種体操競技の実演など、様々なプログラムが用意されていたことが分かる。❷は当日の様子を撮影した写真であるが、一階から二階まで多くの市民で満員となっている体育館の様子が写されており、女性や子どもの姿が多く確認できることが興味深い。画面の中央には引用文中の「ジョーカー」と思われる、白塗りの道化師のような人物も確認され、誰もが楽しめるイベントを通じて横浜YMCAがスポーツの魅力を市民に伝えようと尽力していたことを感じることが出来る。

引用文ではバスケットボールの試合が観衆の注目を集めたことが記載されているが、バスケットボールは1891（明治24）年に、米国で国際YMCAの体育教師、ジェームス・ネイスミスによって創案されたスポーツである。横浜では震災後に横浜公園内に設置されたバスケットボールコート（❸）の管理を横浜YMCAが担い、これを契機として横浜高等商業学校や横浜第二中学校、常盤青年団などでチームが結成され、バスケットボールの普及が進んだ。また、バレーボールも米国のYMCAで1895（明治28）年に創案されたスポーツで、横浜YMCAでは1925（大正14）年に市の教職員を対象としたバレーボール講習会（❹）が行われ、以後急速に市内の学校でバレーボールが浸透することになる。

この他、バドミントンは横浜YMCAによって、本格的に国内で紹介されたスポーツで、1938（昭和13）年に第1回YMCA内大会が開催された。1940（昭和15）年には神奈川県バドミントン協会が設立され、横浜YMCA会館を拠点とする同協会によって、バドミントンの普及が進められた。

これらの競技以外にも、横浜YMCA所蔵資料からは、卓球・レスリング・フェンシング・ヨット・スキー・剣道など多様なスポーツが行われ、なかでも現在のラジオ体操の原型となるデンマーク体操の普及には大きな役割を果たしていたことが把握できる。また、1931（昭和6）年には師範学校卒業生を中心とした婦人体育クラブ（❺）が結成されるなど、女性のスポーツ普及にも貢献していたことは、特筆すべき事例として挙げられる。

このような横浜YMCAの一連の取り組みは、長く同会の体育部主事を務めた広田兼敏の尽力に依るところが大きかった。広田は同会体育部の歴史を手書きで記した『横浜YMCA体育史』（全11巻）を編纂しており、この中には当時の体育史に関する各種の原資料が含まれていることが、今回の調査で明らかになった。また、広田は本稿で掲載したような大正・昭和戦前期の写真資料も大量に整理している。これらの資料群は現在、横浜YMCAが保存・管理をしているが、横浜スポーツ史における第一級の資料として極めて高い価値を持つものであることは明白である。今回の展示で紹介した資料は全体のごく一部であり、今後も機会をとらえてその全貌を紹介したいと考える。

（西村　健）

❸ 震災後横浜公園内に設置されたバスケットボールコート
大正期　横浜YMCA所蔵

❷ 体育実演会
1925（大正14）年　横浜YMCA所蔵

❺ 婦人体育クラブの活動
1931年（昭和6）年　横浜YMCA所蔵

❹ バレーボール講習会記念写真
1925（大正14）年　横浜YMCA所蔵

# 横浜実測図
## 横浜の最初の官製地図

明治維新後、新政府にとって国土の地理を把握することは急務でした。方位と縮尺が正確な、測量にもとづく近代的な地図を作成する作業は当初、政府の二つの機関で着手されます。一つは陸軍で、1871（明治4）年、兵部省陸軍参謀局（当時）が担当しました。もう一つは内務省です。民部省戸籍地図掛（1869年設置）を前身とし、1877（明治10）年に設置された内務省地理局が担当しました。

やがて1884（明治17）年に陸軍が内務省の業務を統合し、参謀本部陸軍部測量局を経て、1888（明治21）年に陸軍参謀本部陸地測量部が発足します。明治時代から昭和の戦前期まで、官製地形図の作成業務を二元的に担っていたのがこの陸地測量部です。当初は縮尺を2万分1としましたが、すぐに5万分1に変更して、大正時代までに日本の全土をほぼ網羅しました。

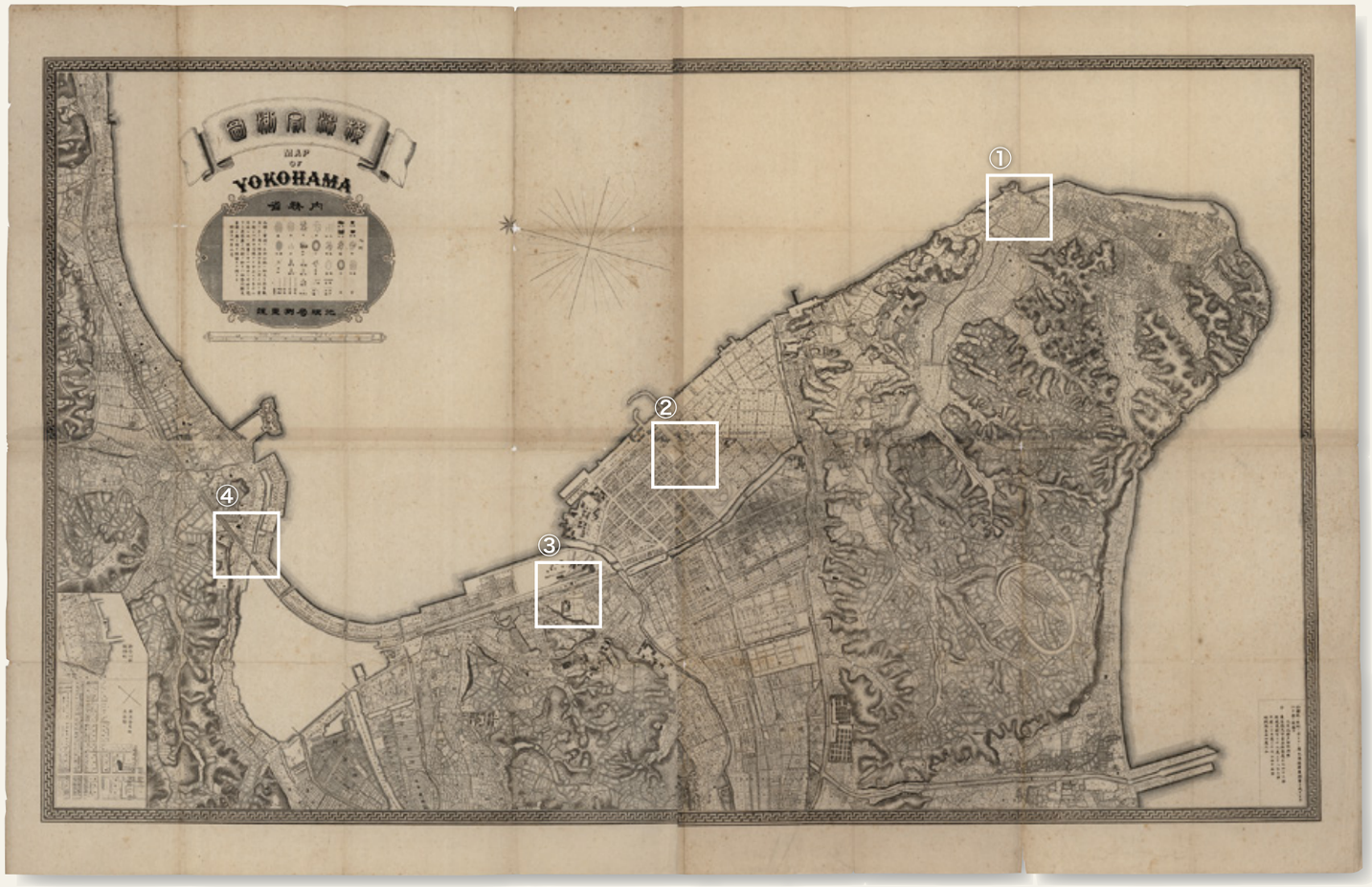
ところで、陸軍による地形図作成が本格化する前に、東京と大阪、横浜と神戸など、主要都市と開港場については、内務省地理局による大縮尺の詳細な都市図が作成されていました。縮尺は5千分1で、実測図と呼ばれます。東京では1886（明治19）～88（同21）年に測図が行われ、大阪では1888（明治21）年、神戸では1881（同14）年にそれぞれ測図が行われています。

横浜については最も早く、1874（明治7）～78（同11）年に測図が行われました。そして、1881（明治14）年に「横浜実測図」として製版されました。大判（タテ115×ヨコ179㎝）の図に、市制施行前の横浜区とその周辺地域が収められています。

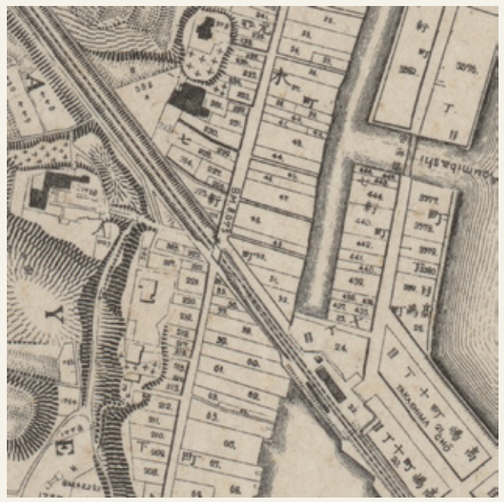
実測図の大きな特徴は、陸地の起伏が等高線ではなく、「ケバ線」と呼ばれる縞模様で表現されていること、また、土地の一筆ごとの境界線が示されていることです。大判の地図であるため、4枚の紙を継いでおり、継ぎ目に貼り合わせのズレがあるという欠点を有しますが、デジタル化することでその補正は可能です。

そして、本図のデジタルデータは、幕末から明治初期の横浜の地理空間を復元するための、格好の基盤地図としての活用が期待されます。

（岡田　直）




**横浜実測図（全体）**
内務省地理局、1881（明治14）年、南之園康仁氏寄贈・当館所蔵、約13%に縮小



**④ 青木橋付近の部分**
崖や掘り割りなど、土地の起伏はケバ線で表現されている。
その線の向きは傾斜の方向に対して平行で、太さは傾斜の角度に比例する。

**③ 横浜停車場（桜木町）付近の部分**
宅地の敷地割りが示され、一筆ごとに地番が付されている。

**② 日本大通り付近の部分**
紙の継ぎ目に貼り合わせのズレがある。

**① 本牧十二天・小湊付近の部分**
農地の区画や、田・畑の別などが記されている。

＊①～④はいずれも原寸大で、図の一辺が400mに相当する。